

## 「主イエスの誕生」

2022年12月23日

ヨセフもダビデの家系であり、またその血筋であったので、ガリラヤの町ナザレからユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。身重になっていた、いいなずけのマリアと一緒に登録するためである。ところが、彼らがそこにいるうちに、マリアは月が満ちて、初子の男子を産み、産着にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる所がなかったからである。（ルカ福音書2：4～7）

その頃、ローマの皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。キリニウスがシリアの総督であった紀元6年頃、パレスチナで住民登録が行われている。そのため、主イエスの誕生は紀元6年という説が生まれている。著者ルカが、史実に触れているのは、イエスの誕生が歴史的事実であることを表わしたいからではないか。登録の目的は兵役徴集と税金徴収のためである。ユダヤ人の場合、安息日には完全に休むので、兵隊としては役に立たず、兵役には徴集しなかったそうである。この時、登録の勅令が出されたのは税金徴収のためである。ローマ帝国を維持するためには、莫大な費用がかかる。それを捻出するため、植民地として支配した国々から税金を徴収した。人々は皆、登録するために、それぞれ自分の町へ旅立った。登録は現住所ではなく、本籍地にするよとの過酷なものであった。人々は大挙して、自分の故郷への旅を強いられた。

マリアの夫ヨセフはダビデ家の血筋を引く家系であったので、ガリラヤのナザレから、本籍地のベツレヘムに上っていった。ベツレヘムはダビデの出身地で、ここが登録する所であったからである。いいなずけになっていたマリアも身重でありながら、一緒に登録するために同行した。ベツレヘムに着いてみると、大勢の人々が登録するためにやって来て、ごった返していた。宿を取ることができず、家畜がいるような場所に泊まらざるを得なかった。そこで、マリアは月満ちて、男の子を産み、乳飲み子を産着にくるんで飼い葉桶に寝かせた。それが、天使ガブリエルが告げたイエスである。著者ルカは、主イエスの誕生の次第をこのように書いている。

この誕生を歴史的事実とするには、いささか無理がある。まず、ヨセフがダビデの家系である証拠は見当たらない。3章に、ダビデに繋がるイエスの系図が書かれているが、歴史的根拠であるとの確証はない。また、ヨセフが生活していたナザレから、身重のマリアを連れて、100 kmも離れたベツレヘムに行き、マリアはその近郊の家畜のいるところで出産したと書いているが、そのことは考えにくい。当時、メシア（キリスト）はダビデの子孫から出、従って、出生地はベツレヘムであるという信仰が流布していた。この信仰を踏まえようと、上記の主イエスの誕生物語を創作したのではないか。

しかしこの記述に、著者ルカは主イエス誕生に関する強いメッセージを込めている。ローマの強力な権力の下で、民衆は何の反抗もできず、徴税のための理不尽な登録にも服さざるを得なかった。また、泊まる所を得ることができず、排除され、家畜のいる所で出産せざるを得なかった。抑圧され、居場所を失い、暗い場で、神の子イエスは「生」を受けられた。このメッセージは、そのまま、主イエスの生涯を映し出している。打ち捨てられ絶望的な世界に住む人々の所に、主イエスは来られ、神の光に照らされて生きる場としてくださる。暗闇で呻く人々は、飼い葉桶の乳飲み子イエスに自分の救いを見て、どれだけ深い慰めと強い励ましを受けて来ただろうか。